

糸魚小学校

正会員 加 藤 誠 君
正会員 金 箱 温 春 君
正会員 鈴 木 大 隆 君

旭川から車で1時間半ほど北方の士別市にある、1学年10人あまりの小規模な小学校である。市町村合併による老朽化した旧校舎の建て替えで、プロポーザルコンペによる設計者決定後に、地盤の悪かった山の斜面から中学校と校庭を共有する平坦な敷地に変更された。

山に囲まれた東西に長い平坦な地域に季節を通じて吹く西風に対して、多雪地域における雪処理として、雪庇や吹きだまりのできにくい外観の形状が風洞実験によって検証された。そうしてできたのが、2列の線対称のトップライトと体育館のボリュームが、全体を覆う水平庇から突き出た大きなつば付きの帽子のような屋根形状である。

建物の四周は開放的で塀や高い建物がないため、その少し浮いたように見える屋根が大自然と家と建物の中間的な存在感となって、周辺に馴染んでいる。小規模でありながら体育館も含むという特殊な条件をふまえ、大きなトップライトのボリュームを設定したところがユニークである。

雪国の子どもの学校生活は、ほとんど内部で完結するので小規模校ならではの家庭的な一体感をこの大屋根と平屋の平面構成で統合している。南北の窓際には教室を配し、奥行きのある深い平面形の中央には移動を兼ねた多目的スペースをとっているが、トップライトからの採光があるため、自然光を感じられる場所となっている。水平庇の構造を露出した小梁のルーバーやポリカーボネートの複層板、乳半のガラスなどによって、場所ごとの活動に応じて光の状態が調整されており、内部空間に奥行きと広がりがつくられると同時に、面的な平屋の活動に多様さをもたらしている。子どもたちは変化する太陽の光の状態を敏感に享受しながら1日を過ごす。特にランチタイムは学年ごとに毎回好きな場所を選んで食べているようで、訪問した際にもピクニックのような気ままな風景が印象的であった。

トップライトからは自然換気も行い、「全ての空間をペリメーターゾーンとする」という考えのとおり、物理的に厚みのある壁や屋根のかわりに、気積のある空気によって快適な室内空間の環境を確保している。

構造的には、鉄骨のポスト柱や水平力を負担している片持ちのRC壁を必要な壁にさらりと納め、木造の水平庇とのハイブリットでありながら複雑さの感じられないシステムとなっている。内部空間の面的な広がりや水平庇の小梁がより特徴づけており、構造とデザインの無理のない関係の中で、地場産木材がそつなく使用されている。

全体を通して、地域特有の条件にうまく対処しながら必要な性能や地球環境への配慮も含み込んだうえで、力みのないサステナビリティのある環境をつくりだすことに成功している。小学校という計画学的な基準と制約が多いビルディングタイプに対して、地域社会に開かれた回答として優れていると評価した。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。